

中国語とタイ語の移動事象表現

高橋清子

要旨

中国語とタイ語は共に、移動関連の意味を持つ3種類の形態素（使役／様態形態素、経路形態素、直示形態素）を組み合わせることで単一の移動事象を表すことが多い。これまでの移動事象の類型論研究では、両語で表される移動事象は同一類型に分類されてきた。しかし実際には、両語の移動事象表現には大きな違いがある。中国語の移動事象表現は、節構成素の統合度（統語スロットの固定化、経路動詞の文法化）が高く、意味構成素の多様性が低いのに対し、タイ語の移動事象表現はその逆の特徴を持つ。両語で表される移動事象は異なる類型に分類されるべきである。*

1. はじめに

中国語とタイ語はよく似た言語特徴を有し、「声調言語、孤立語、SVO言語、動詞連続言語、主題卓越言語」など、共通の言語類型に分類されることが多い（高橋 2006: 34–35）。移動事象表現に関して言えば、3種類の移動関連の形態素——すなわち、移動の様態を表す形態素あるいは移動の原因（使役事象）を表す形態素と、移動の経路を表す形態素と、移動の直示関係を表す形態素——が組み合わされた単一の節（e.g. (1)–(7)）が高い頻度で使われることが両語に共通している（Kessakul 2005: 318, 356; Lamarre 2007: 13）。

- (1) 中 pǎo jìn-lái
 走る 入る-来る
 ‘走って入って来る’

* 本稿は日本言語学会第147回大会（神戸市外国語大学、2013年11月23–24日）において口頭で発表した内容に修正を施しまとめ直したものである。

(2) 中	bǎ-qiú	rēng	jin-lai	
	ACC-球	投げる	入る-来る	
	‘球を投げ入れる’			
(3) 中	rēng	jin-lai	yí-ge	qiú
	投げる	入る-来る	1-CLF	球
	‘球を投げ入れる’			
(4) 中	rēng	yí-ge	qiú	jin-lai
	投げる	1-CLF	球	入る-来る
	‘球を投げ入れる’			
(5) 中	rēng-jin	yí-ge	qiú	lai
	投げる-入る	1-CLF	球	来る
	‘球を投げ入れる’			
(6) タ	wīn	khâw	maa	
	走る	入る	来る	
	‘走って入って来る’			
(7) タ	yoon	lûuk bəon	khâw	maa
	投げる	球	入る	来る
	‘球を投げ入れる’			

既存の移動事象の類型論研究（e.g. Talmy 2000: 21–146, 213–288; Croft 2003: 219–224）では、中国語やタイ語などの動詞連続言語は同一の言語タイプとして一様に扱われているが、恐らくそれは動詞連続言語のこのような典型的移動事象表現の類似性に注目しているからであろう。しかし実際には、中国語とタイ語の移動事象表現の統語構造および両語で表される移動事象の概念構造には大きな違いがある。

本稿の目的は 2 つある。第一に、中国語移動事象表現とタイ語移動事象表現の違い——節構成素同士の統合度が中国語では高くタイ語では低いこと、それに反比例して、移動の様態や経路といった移動事象の意味構成素タイプの多様性が中国語では低くタイ語では高いこと——を明示的に説明する。第二に、その差異を根拠とし、両語で表される移動事象はそれぞれ異なる類型に分類されるべきであると主張する。本稿の構成は以下の通りである。まず、中国語とタイ語の移動事象表現の特徴を対照して説明する（第 2 節）。次に、これまで提案

されてきた移動事象の類型を概観し、両語で表される移動事象はそれぞれどのような類型に分類されるべきかを論じる（第3節）。第4節で結論を述べる。

2. 中国語移動事象表現とタイ語移動事象表現の対照

Post (2007) は、中国語とタイ語のいくつかの動詞対を比較対照し、それらの動詞の文法化および複合語化の進捗には両語で差が見られることを明らかにした。中国語の実質語由来の機能語はタイ語の実質語由来の機能語より統語制約が強く見られ、音韻弱化和実質的意味の薄れも大きく、従ってより文法化が進んでいるという。中国語の複合語はタイ語の複合語より生起頻度が高く、話者による内部構造の分析性認識が弱く、また意味変化も起こっており、従ってより慣用化、固定化が進んでいるという。以下の小節で詳しく見ていくが、このような違いは移動事象表現の構成素である移動関連の形態素にも当てはまる。

本節では「統語スロットの固定化、経路動詞の文法化、移動事象の意味構成素の多様性」という3つの観点から中国語移動事象表現とタイ語移動事象表現の異同を説明していく。その前に、両語の移動事象表現の基本単位である移動関連の形態素の組み合わせパタンの概要を見ておきたい。

両語の移動事象表現の最小形は移動動詞を1つだけ含む自律移動事象表現¹である。中国語の例を(8)–(10)に、タイ語の例を(11)–(16)に挙げた。それぞれの移動動詞には語釈の他、その種類を[]の中に示した。動詞によっては経路参照点（起点、通過点、通過経路、着点）を表す名詞句を直接従えることができる。自律移動事象表現（e.g. (1)(6), (8)–(16), (28)）の先頭には移動物を表す名詞句が生起し得る。

(8)	中	wǎng	jiā	zǒu	
		～の方へ	家	歩く[様態]	‘家に向かって行く’

¹ 例文(8)のように、移動動詞の他、空間関連の前置詞句（e.g. wǎng～～の方へ）を含む場合もある。

(9) 中	huí	xuéxiào		
	戻る[経路]	学校		‘学校に戻る’
(10) 中	qù			
	行く[直示]			‘去る’
(11) タ	dəən			
	歩く[様態]			‘歩く’
(12) タ	rŭaŋ			
	(付着先から) 落ちる[起動相経路 (瞬間相経路)]			‘落ちる’
(13) タ	com			
	(海底などに) 沈む[前終結相経路 (瞬間相経路)]			‘沈む’
(14) タ	khâam			
	越える[達成相経路]			‘越える’
(15) タ	paj			
	行く[直示]			‘行く’
(16) タ	thŭŋ			
	到着する[移動停止 (到着)]			‘到着する’

物を動かす作用とその物の動きの両方を含む使役移動事象——すなわち、使役事象と移動事象を含む、複雑だがまとまりのある単一事象——を表すためには、中国語では少なくとも「使役動詞」と「経路助辞あるいは直示助辞」²が必要である (e.g. (17)(18))。タイ語では少なくとも「使役動詞」と「達成相経路動詞あるいは直示動詞」が必要である (e.g. (19)(20))。使役移動事象表現 (e.g. (2)–(5), (7), (17)–(20), (23)(24)(27)) の先頭には移動物を動かすもの (移動事象を引き起こすもの) を表す名詞句が生起し得る。

(17) 中	ná-chu	ge	dōngxi	
	手に持つ[使役]-出る[経路]	CLF	物	‘物を持って出る’
(18) 中	jì-lai	yì-fēng	xìn	
	送る[使役]-来る[直示]	1-CLF	手紙	‘手紙を送って来る’
(19) タ	thŭŋ	khayà?	loŋ	nay mĕe nám
	捨てる[使役]	ゴミ	下る[達成相経路]	～の中 川 ‘ゴミを川に捨てる’
(20) タ	sòŋ	còtmăaj	maa	
	送る[使役]	手紙	来る[直示]	‘手紙を送って来る’

² 伝統的な中国語文法では、「経路助辞 (e.g. -chu)、直示助辞 (e.g. -lai)、経路+直示助辞 (e.g. -chu-lai)」は「方向補語」と呼ばれている。

中国語でもタイ語でも、最も生起頻度の高い典型的移動事象表現は3種類の移動関連形態素が組み合わされた形である。(21)(22)の網掛け部分、「選好形」のところを見てほしい。中国語移動事象表現(21)の選好形は「様態動詞あるいは使役動詞」と「経路＋直示助辞」の組み合わせである。第1節に挙げた(1)は中国語の自律移動事象表現の選好形の例、(2)–(5)は使役移動事象表現の選好形の例である。

(21) 中国語移動事象表現

最小形 自律移動事象：{様態／経路／直示} 動詞, e.g. (8)–(10)

使役移動事象：使役動詞、{経路／直示} 助辞, e.g. (17)(18)(5) ³

選好形 自律移動事象：様態動詞、経路＋直示助辞, e.g. (1)

使役移動事象：使役動詞、経路＋直示助辞, e.g. (2)–(5)

一方、タイ語移動事象表現(22)の選好形は「様態動詞あるいは使役動詞」と「達成相経路動詞」と「直示動詞」が組み合わされた形である。第1節に挙げた(6)はタイ語の自律移動事象表現の選好形の例、(7)は使役移動事象表現の選好形の例である。

(22) タイ語移動事象表現

最小形 自律移動事象：{様態／起動相経路／前終結相経路／達成相経路／直示／移動停止} 動詞,
e.g. (11)–(16)

使役移動事象：使役動詞、{達成相経路／直示} 動詞, e.g. (19)(20)

選好形 自律移動事象：様態動詞、達成相経路動詞、直示動詞, e.g. (6)

使役移動事象：使役動詞、達成相経路動詞、直示動詞, e.g. (7)

最大形 使役移動事象：使役動詞*、様態動詞*、瞬間相（起動相／前終結相）経路動詞*、
達成相経路動詞*、直示動詞、到着（移動停止／状態変化）動詞, e.g. (23)

中国語移動事象表現とタイ語移動事象表現の最も大きな違いは、単一の移動事象を表すのにどれだけの移動関連形態素を使えるかという点にある。(22)の「最大形」のところを見てほしい。タイ語では単一の移動事象を表す1つの節の中に6種類の異なる動詞が生起し得る (e.g. (23))。

³ (5)の「rēng-jìn」は、(17)の「ná-chu 持って出る」と同様、「rēng 投げる」と「jìn 入る」という2つの動詞が合わさって「投げ入れる」という意味の複合語（使役動詞）を形成していると考えてよいかもしれない。そうだとすれば、(5)は(18)と同じ「使役動詞」と「直示助辞」が組み合わされた形である。

(23) タ	tèʔ	lûuk bəən klîŋ	yóʔn	ʔəʔk	paj	yùt
	蹴る	球	転がる	折り返す	出る	行く
	[使役]		[様態]	[起動相経路]	[達成相経路]	[直示]
	nâa	tûu				
	～の前	棚				
	‘球を蹴って（球が）転がって折り返して出て行って棚の前で止まる’					

中国語では使役動詞と様態動詞は同一スロットを奪い合う競合関係にあり共起しないが、タイ語ではそれらの動詞にはそれぞれ専用スロットが用意されており、無理なく共起する。例えば(23)(24)では使役動詞「tèʔ蹴る」と様態動詞「klîŋ 転がる」が共起している。さらに、(22)の最大形のところでアステリクス(*)が付けられている動詞は1つの節の中に複数生起可能である。例えば(24)には2つの達成相経路動詞「phàan 通る、ʔəʔk 出る」が使われている。⁴

(24) タ	tèʔ	lûuk bəən klîŋ	phàan	pratuu	ʔəʔk	paj
	蹴る	球	転がる	通る	門	出る
	[使役]		[様態]	[達成相経路]		[達成相経路]
						[直示]
	‘球を蹴って（球が）転がって門を通して出て行く’					

2. 1. 統語スロットの固定化の度合い

中国語移動事象表現には単純移動事象構文スキーマ(25a)と複雑移動事象構文スキーマ(25b)という2つの基本構文スキーマ⁵がある。前者(25a)の統語スロットは動詞スロット1つである。後者(25b)には2つの統語スロットがあり、第1スロットが動詞スロット、第2スロットが助辞スロットである (Talmy 2009: 398–400)。経路を表す形態素と直示関係を表す形態素は、単純移動事象構文スキーマ(25a)に生起すると、経路動詞、直示動詞として機能し、単独で自律移動事象を表す (e.g. (9)(10))。複雑移動事象構文スキーマ(25b)に生起すると――つ

⁴ しかし「khâw 入る、ʔəʔk 出る、khûn 上る、loŋ 下る」の4つの達成相経路動詞には共起制限があり、1つの節の中にそれらの動詞は通常1つしか生起しない。ただし「出たり入ったり、上ったり下ったり」という意味を表すためには khâw ʔəʔk khâw ʔəʔk, khûn loŋ khûn loŋ, khûn khûn loŋ loŋ などのように複数並べて使う (高橋 to appear)。

⁵ 中国語移動事象表現の基本構文スキーマ(25)とタイ語移動事象表現の基本構文スキーマ(26)には前置詞句や副詞句の統語スロットは含まれていない。従属節も含まれていない。

まり使役動詞あるいは様態動詞と組み合わせられると——2 番目の助辞スロットに生起し、助辞として機能する。使役移動事象を表すには、使役動詞の他、少なくとも経路助辞か直示助辞かのどちらかが必要である (e.g. (2)–(5), (17)(18))。

(25) 中国語移動事象表現の基本構文スキーマ

a. 単純移動事象構文スキーマ

単純移動事象
Manner / Path

(8) 様態動詞

(9) 経路動詞

(10) 直示動詞

b. 複雑移動事象構文スキーマ

複雑移動事象	
1: Co-event	2: Path

(17) 使役動詞 経路助辞

(18)(5) 使役動詞 直示助辞

(1) 様態動詞 経路＋直示助辞

(2)–(5) 使役動詞 経路＋直示助辞

一方、タイ語移動事象表現の基本構文スキーマ(26)には 6 つの統語スロットがあり、全て動詞スロットである (Takahashi 2009b: 185–191)。第 1 スロットには使役動詞、第 2 スロットには様態動詞、第 3 スロットから第 5 スロットには経路関連動詞 (瞬間相 {起動相/前終結相} 経路動詞、達成相経路動詞、直示動詞) が生起する。第 6 スロットには経路概念を含む到着動詞である移動停止動詞 (e.g. yùt 止まる) の他、経路概念を含まない到着動詞である状態変化動詞 (e.g. tèk 割れる) が生起することもある (cf. 2.3 節の表 2)。第 3 スロット～第 6 スロットに生起する経路動詞は単独あるいは合同で単一経路を表す。表す副事象のタイプ別に動詞を分類すれば、第 1 スロットの動詞は「使役事象」を表す動詞、第 2 スロットから第 5 スロットの動詞は「移動事象」を表す動詞、第 6 スロットの動詞は「到着事象」を表す動詞である。移動事象を表す動詞の全てと移動停止動詞は単独で自律移動事象を表すことができる (e.g. (11)–(16))。使役移動事象を表すには、使役動詞の他、少なくとも達成相経路動詞か直示動詞かのど

ちらかが必要である (e.g. (7)(19)(20)(23)(24)(27))。

(26) タイ語移動事象表現の基本構文スキーマ

使役事象	移動事象				到着事象
1: Cause	2: Manner	3: Path	4: Path	5: Path	6: Path / Change-of-state

(11)	様態動詞				
(12)	起動相経路動詞				
(13)	前終結相経路動詞				
(14)	達成相経路動詞				
(15)	直示動詞				
(16)	移動停止動詞				
(19)	使役動詞	達成相経路動詞			
(20)	使役動詞	直示動詞			
(6)		様態動詞	達成相経路動詞	直示動詞	
(7)	使役動詞		達成相経路動詞	直示動詞	
(24)	使役動詞	様態動詞	達成相経路動詞	直示動詞	
(27)	使役動詞	起動相経路動詞	達成相経路動詞	直示動詞	移動停止動詞
(23)	使役動詞	様態動詞	起動相経路動詞	達成相経路動詞	直示動詞 移動停止動詞

(1)–(5)の中国語の選好形と(6)(7)のタイ語の選好形だけを見れば、確かにそれらは似ている。しかし、それぞれどのような統語スロットを含む構文の具現形であるのか、その構文の全体像（基本構文スキーマ）を追求してみると、中国語とタイ語には大きな違いがあることがわかる。

中国語の単純移動事象構文スキーマ(25a)の唯一の統語スロットには必ず1つの動詞（様態動詞か経路動詞か直示動詞、あるいは移動関連形態素を含む複合動詞）が生起する。複雑移動事象構文スキーマ(25b)の統語スロットは2つだが、やはり第1スロットには必ず1つの動詞（使役動詞か様態動詞、あるいは移動関連形態素を含む複合動詞）が生起する。第2スロットには、経路動詞起源あるいは直示動詞起源の助辞が単体あるいは複合体で生起する。つまり中国語の移動事象を表す基本単位は、動詞単体あるいは「動詞＋助辞」の形式⁶となる。

⁶ 「動詞＋助辞」の形式は、完全に固定化された複合動詞とは異なり、動詞と助辞の間に不定の普通名詞句が入り込むことを許す (e.g. (4)(5))。

一方、タイ語の基本構文スキーマ(26)の統語スロットは 6 つもあり、全てが動詞スロットである。使役動詞と経路関連動詞は、移動物や経路参照点を表す名詞句を直接従えることができる (e.g. (27)⁷)。

(27) タ	tèʔ.....lùuk bəɔn	càak.....khân nɔ̀ɔk	phàan.....pratuu
蹴る	球	離れ去る	外 通る 門
[使役]		[起動相経路]	[達成相経路]
khâw	maa	thǔŋ.....thîi nîi	
入る	来る	到着する	ここ
[達成相経路]	[直示]	[移動停止]	
‘球を蹴って（球が）外を離れて門を通して入って来てここに至る’			

中国語の基本構文スキーマ(25)と異なり、タイ語の基本構文スキーマ(26)には動詞の生起が必須とされるスロットはない。多種多様な動詞の組み合わせが可能であり、自由に伸び縮みする。中国語移動事象表現の統語スロットは固定化の度合いが高いのに対し、タイ語移動事象表現の統語スロットは固定化の度合いが非常に低いと言える。

2. 2. 経路動詞の文法化の度合い

中国語の経路／直示助辞（方向補語）は表 1 のようなパラダイムを成す。⁸

表 1：中国語の経路／直示助辞（方向補語）（Lamarre 2008: 72）

	up (goal-oriented) -shang	up (source-oriented) -qi	down -xia	in -jin	out -chu	back -hui	over, through -guo	to -dao
hither -lai	-shang-lai	-qi-lai	-xia-lai	-jin-lai	-chu-lai	-hui-lai	-guo-lai	-dao... lai
thither -qu	-shang-qu		-xia-qu	-jin-qu	-chu-qu	-hui-qu	-guo-qu	-dao... qu
go away -zǒu								

⁷ (27)では 4 つの動詞——使役動詞「tèʔ蹴る」、起動相経路動詞「càak 離れ去る」、達成相経路動詞「phàan 通る」、移動停止動詞「thǔŋ 到着する」——が名詞句を従えている。

⁸ 起点に焦点がある「-qi 上る」は「-qu 行く」とは共起しない。また、必ず名詞句を伴う「-dao 到着する」は前置詞もどきである（Lamarre 2007: 12; Lamarre 2008: 72）。

Lamarre (2007: 11–19) は、多岐にわたる証拠を挙げて、中国語の複雑移動事象構文スキーマの第2スロットに生起する形態素は動詞(実質語、自由形態素)ではなく助辞(機能語、拘束形態素)である——すなわち文法化を遂げている——と主張した。例えば、音韻面では、声調の対比を失い、強勢がなく、前置の様態動詞あるいは使役動詞と同じ韻律単位で発音される。形態面では、限られた少数の構成素から成る閉じられたパラダイム(表1)を成し、様態動詞あるいは使役動詞との組み合わせに制約がある。統語面では、元々の項構造を失っている。意味面では、一般化された意味を表す動詞(e.g. *nòng*, *gǎo* ‘to make, to do’) が第1スロットを埋めるためだけに使われることがある。

タイ語でもいくつかの経路動詞は特定の統語環境の下で助辞として機能する。起動相経路動詞「*càak* 離れ去る」、達成相経路動詞「*taam* 従う」、移動停止動詞「*thǔŋ* 到着する、*sùu* 到着しその場に止まる」は、生起する統語位置によって、空間移動を表す動詞であったり、非時間的な位置関係を表す前置詞であったりする。⁹ 動詞として機能するときは後ろに場所名詞句を従えたり従えなかったりするが、前置詞として機能するときは必ず場所名詞句を従える(e.g. (28))。達成相経路動詞「*khâw* 入る、*ʔòok* 出る、*khûn* 上る、*loŋ* 下る」と、相に関して中立的な直示動詞「*maa* 来る、*paj* 行く」は、移動事象表現に使われるときは空間移動の意味を表すが、アスペクト標識やモダリティ標識などの助辞としての機能も持つ(e.g. (29)–(35))。助辞化する統語環境はそれぞれの動詞で異なる。

⁹ *càak* と *taam* は、移動事象を表す基本単位「様態動詞、瞬間相経路動詞、達成相経路動詞、直示動詞」の中での決まった語順(*càak* は様態動詞の後ろ、且つ、達成相経路動詞、直示動詞の前; *taam* は様態動詞、瞬間相経路動詞の後ろ、且つ、直示動詞の前)を逸脱したときにそれぞれ起点前置詞、通過経路前置詞として機能する(Kessakul 2005: 94, 156–158)。 *thǔŋ* と *sùu* は起点前置詞句あるいは通過経路前置詞句に続くときに着点前置詞として機能し、さらに *sùu* は到着動詞「*khâw* 入る」に続くときにも着点前置詞として機能する(Takahashi 2005: 116–117)。 *khâw* は達成相の読み(達成相経路動詞)と瞬間相の読み(到着動詞)の両者が可能である。

¹⁰ Takahashi (2005, 2009b, to appear)によれば、*khâw*、*ʔòok*、*khûn*、*loŋ* は、形状、性質、属性などの状態を表す静的動詞や思考、心理活動などを表す認知動詞に続くとき起動相標識 INC(=inchoative)として機能する(e.g. (29)(30))。 *maa*、*paj* は、過程、感情、行為を表す動

(28) タ	wiŋ	maa	càak.....bâan	taam.....thanôn	thũŋ.....rooŋ rian
	走る	来る	～から 家	～に沿って	大通り ～まで 学校
	‘家から大通りに沿って学校まで走って来る’				
(29) タ	ʔu an		khui n		
	太っている		INC		‘太る’
(30) タ	nuŋ k		ʔò ɔk		
	思う		INC		‘思いつく’
(31) タ	ʔò t thon		maa		
	耐える		CONT		‘耐えてきた’
(32) タ	pli an		paj		
	変わる		INC		‘変わる’
(33) タ	kin	khâ aw	maa		
	食べる	飯	PRF		‘もう食事をした’
(34) タ	nà k		paj		
	重い		EVL		‘重すぎる’
(35) タ	tham		paj		
	する		EVL		‘やってしまった’

しかしこれらのタイ語の経路動詞は、助辞として機能するときも音韻弱化は起こらず、複合語を形成しない。また、表 1 のような固定化したパラダイムを成立させていない。メンバーが 2 つだけの直示動詞を除き、タイ語の移動動詞はどの種類もかなり多くのメンバーで成り立っている (Kessakul 2005: 40–97)。そして組み合わせは基本的に自由である。総じて、タイ語の経路関連形態素は中国語の経路関連形態素に比べて文法化、複合語化の度合いが低いと言える。

2. 3. 移動事象の意味構成素の多様性の度合い

タイ語の移動事象表現は構成素動詞のアスペクトタイプが特定された構文 aspect-type-specific construction (Takahashi 2009a: 42) である。タイ語移動事象

詞に続く継続相標識 CONT(=continuous)として機能し (e.g. (31))、状態変化を表す動詞に続く起動相標識 INC として機能する (e.g. (32))。maa はある種の行為を表す動詞に続いて完了標識 PRF(=perfect)としても機能する (e.g. (33))。paj は状態を表す動詞やある種の行為を表す動詞に続くとその状態や行為の過度性 (「相応しい適度な度合いを超えている」という話者の判断)を表す心的態度標識 EVL(=evaluation)として機能する (e.g. (34)(35))。

表現の構成素動詞は、表す副事象の種類およびアスペクトの種類の違いによって、表 2 に挙げた①～⑥の 6 種類に分類できる。

表 2：タイ語移動事象表現の構成素動詞の典型的アスペクト (Kessakul 2005, Takahashi 2009b, 高橋 to appear)¹¹

使役事象	①使役動詞 1 開始時起動型使役動詞「yoon 投げる」など 2 随伴運搬型使役動詞「nam 導く」など 3 継続操作型使役動詞「waan 置く」など	起動相（瞬間相） 継続相 達成相
移動事象	②様態動詞「win 走る」など ③瞬間相経路動詞 1 起動相経路動詞「ruan ～から落ちる」など 2 前終結相経路動詞「com ～に沈む」など ④達成相経路動詞「kham 越える」など ⑤直示動詞「paj 行く、maa 来る」	継続相 起動相（瞬間相） 前終結相（瞬間相） 達成相 相に関して中立的
到着事象	⑥到着動詞 1 移動停止動詞「thuan 到着する」など 2 状態変化動詞「tek 割れる」など	瞬間相 起動相（瞬間相）

①～⑥の動詞はそれぞれ専用の統語スロットを持ち（cf. 2.1 節の(26)）、お互い競合することなく、1つの節の中で共起することが可能である。1つの節に異なる種類の動詞が共起するとき、必ず小さい番号から大きい番号の順に生起する。⑤と⑥の動詞は 1つの節に通常 1つしか生起しないが¹²、①～④の動詞は複数共起し得る。また、使役事象、移動事象、到着事象という 3つの副事象は、そのどれか 1つだけを選んで表現することもできるが、2つあるいは 3つを選んで組み合わせて表現することもできる。複数の副事象を 1つの節で表現するときは、それらの副事象は全体の事象構造の中で隣り合う副事象同士でなければ

¹¹ 表 2 に挙げられたアスペクトタイプの中で、「起動相、継続相、達成相、瞬間相」はよく知られたタイプであるが、「前終結相 *prestadi*al (Bisang 2003: 48)」はあまり知られていないタイプである。前終結相は、起動相と同じく「時間幅を持たない変化、方向性」を表す瞬間相の下位分類である。起動相は（「付着先から落ちる」など）「起点からの変化、方向性」を表すのに対し、前終結相は（「底に沈む」など）「終点への変化、方向性」を表す。

¹² ⑤の直示動詞「paj 行く、maa 来る」は「行ったり来たり」という意味を表すためであれば、～paj～maa、paj paj maa maa のように並べて使うことができる (Takahashi 2009: 187; 高橋 to appear)。

ばならない。¹³

以上を要約すると、タイ語移動事象表現の副事象タイプは3種類(使役事象、移動事象、到着事象)あり、副事象タイプとアスペクトタイプの違いによって統語スロットを異にする6種類(①使役動詞、②様態動詞、③瞬間相経路動詞、④達成相経路動詞、⑤直示動詞、⑥到着動詞)の移動動詞タイプが認められる。タイ語話者はそうした多様性に富んだ移動動詞を適宜組み合わせて移動事象を表現する。

中国語でも移動動詞のアスペクトタイプに注目して移動事象表現の構造を分析する試みがなされている。例えば Lin & Peck (2011) は、アスペクトの段階性と非段階性の区別 (scalar vs. nonscalar changes, manner vs. result) に基づいて中国語移動事象表現の体系性、規則性を明らかにした。しかし先に述べた通り、中国語の複雑移動事象構文スキーマの統語スロットは2つしかなく、中国語で表される複雑移動事象の意味構成素は大きく「移動の経路 path, core event」と「その経路と組み合わされる移動の原因や様態などの共事象 co-event, supporting event」に2分されている。¹⁴ しかも動詞が生起できるのは第1スロットしかないため、共事象動詞(使役動詞、様態動詞)は全て競合関係にある。

15

¹³ 言い換えれば、真ん中の移動事象を表現せずに初めの使役事象と終わりの到着事象を1つの節で表現することはできない。ただし「waan 置く」などの継続操作型の使役動詞は、使役事象と移動事象の両者を含む意味を表す達成相の使役動詞なので、「thâap 覆う」などの到着事象を表す移動停止動詞を直接従えることができる。例えば「waan phâa thâap dân bon tûu ‘布を置き(布が)棚の上の面を覆う’」などと表現できる(高橋 to appear)。

¹⁴ Lin & Peck (2011: 370, 376) によれば、直示形態素を除く移動関連形態素が3つ連続することは少なく、集めたデータにもそのような例は6例しかなかったという。その中の5例は着点名詞句を必ず伴う前置詞もどきの「dao...」を含み、4例は経路助辞を含む。(「dao...」以外の) 経路助辞を含まない例は6例中2例しかなく、その2例とも「huá-luò dao...」の形である。「huá-luò ‘slide-fall’ 滑り落ちる」は複合動詞と見なし得るのではないか。なお、Lin & Peck (2011: 358)は「-rù ‘enter’、-kāi ‘open, apart’」も経路助辞(生産的な拘束形態素)であると考え、「pǎo-rù ‘run-enter’ 駆け込む、pǎo-kāi ‘run-apart’ 逃げ出す」などを「様態動詞+経路助辞」の例に含めている。

¹⁵ Ji et al. (2011: 1057)によれば、中国語で使役移動事象が表されるとき、対格標識「把 ba」を含む単節の構文(e.g. (2))が使われることが多いが、しかしそれと同じくらい高い頻度で、継続相標識「着 zhe」を伴った使役動詞を含む従属節と様態動詞を含む主節が組み合わされた構文(e.g. tui zhe qiú zǒu shàng shān ‘球を押しながら丘に歩いて上る’)が使用さ

移動事象表現の意味構成素タイプの多様さは、統語スロットの多さに比例し、逆に、節統合度の高さに反比例する。統語スロットが少なく節統合度が高い中国語では、移動事象表現の意味構成素タイプが貧弱である。一方、統語スロットが多く節統合度が低いタイ語では、移動事象表現の意味構成素タイプが豊富である。

3. 移動事象の類型論

本節では移動事象の類型論の観点から中国語とタイ語を対照する。これまで提案されてきた移動事象の類型論、あるいはもっと広く複雑事象構文の類型論は、(36)に示した通り、分類基準の違いによって大きく 2 つに分類できる。第一の類型論は、移動事象の中核的意味構成素である「経路」が主動詞語幹によって表されるか否かを基準とするものである。第二の類型論は、節構成素（形態的、統語的要素）の間の統合度——つまり「節統合度」——の高低を基準とするものである。

(36) 移動事象（複雑事象構文）の類型論

A. 経路 core event (vs. 移動の様態／原因 supporting event) が主動詞語幹 head によって表されるか否か

A1. 二元論的分類：「主動詞語幹枠づけ」対「付随要素枠づけ」

Verb- vs. Satellite-framing (Talmy 2000, 2009)

Head- vs. Nonhead-framing (Matsumoto 2003)

A2. 三元論的分類：「主動詞語幹枠づけ」対「付随要素枠づけ」対「均等枠づけ」

Verb- vs. Satellite- vs. Equipollently-framing (Slobin 2004)

Head- vs. Extrahead- vs. CoHead-coding (松本 2013)

B. 節統合度 (Croft et al. 2010)：連続体

Double-/Satellite-framing > Verb-framing/Compounding > Serialization > Coordination

二重枠づけ／付随要素枠づけ > 主動詞語幹枠づけ／複合 > 連続 > 並列

第一の類型論(A)には、二元論的分類(A1)と三元論的分類(A2)が含まれる。二

れるという。前者の「把 ba」構文には様態動詞が含まれないのに対し、後者の「着 zhe」構文には様態動詞が含まれる。「着 zhe」構文では、移動の原因と移動の様態という 2 つの共事象が従属節と主節によってそれぞれ表現される。

元論的分類では、経路が主動詞語幹（節の主要部）で表される「主動詞語幹枠づけ」タイプと経路が主動詞語幹の付随要素（節の非主要部）で表される「付随要素枠づけ」タイプに2分される。三元論的分類では、それら2つのタイプにもう1つ、「経路」と「様態や原因などの共事象」の両者が同等の形式で表される「均等枠づけ」タイプが加わる。

第二の、節統合度を基準とする類型論(B)は、より広範な統語形式を分析対象とし、「二重枠づけ、付随要素枠づけ、主動詞語幹枠づけ、複合、連続、並列」というそれぞれの複雑事象構文タイプの節統合度の連続性に注目している。「二重枠づけ」タイプは、主動詞語幹とその付随要素の両方で経路を表す。「複合」タイプは、節構成素同士の形態的結合が見られる。「連続」タイプは、単一の節に複数の動詞述語を含む。「並列」タイプは、2つの節が並列している。二重枠づけタイプと付随要素枠づけタイプの節統合度が最も高く、主動詞語幹枠づけタイプと複合タイプ、連続タイプ、並列タイプという順番で節統合度は低くなっていく。

三元論的分類(A2)は、主動詞語幹でもなく付随要素でもない形式¹⁶を認め、より広い統語形式を扱おうとしているという点で、節統合度を基準とする分類(B)に似ている。しかし両者には根本的な違いがある。三元論的分類は、二元論的分類と同様に「経路が主動詞語幹によって表されるか否か」という基準を唯一の基準としている。それは、Beavers et al. (2009)や Rappaport Hovav & Levin (2010)による「様態 manner と（経路を含む）結果 result は相補分布関係にある（様態／結果の相補分布 manner/result complementarity の仮説）¹⁷」という二元

¹⁶ 具体的には、「連続動詞 serial verb、2分裂動詞 bipartite verb、前置動詞 preverb」という形式である（Slobin 2004: 247–249）。

¹⁷ Beavers et al. (2009)や Rappaport Hovav & Levin (2010)が提唱する「様態／結果の相補分布」の仮説にとって、Zlatev & David (2003: 34–35)や Zlatev & Yangklang (2004: 167–168)が主張する「様態兼経路動詞 (Manner + Path (MP) verbs)」(e.g. phlòo ‘pop out’, thalú? ‘pierce’) というタイ語移動動詞の下位分類の存在は不都合なものであるようだ（Beavers et al. 2009: 358–359, footnote 14）。しかしタイ語の移動動詞体系の真相は、さらに都合の悪いことに、もっと複雑で込み入った様相を呈している（cf. 2.3 節の表 2）。

論の主張と軌を一にしている。三元論的分類は、二元論的分類の2タイプ（主動詞語幹が経路を表す「主動詞語幹枠づけ」タイプと付随要素が経路を表す「付随要素枠づけ」タイプ）に、それに当てはまらない新たな1タイプ（経路を表す形式と共事象を表す形式が文法的に同等の形式である「均等枠づけ」タイプ）を加えただけのものであり、本質的に同一基準の分類である。

しかし節統合度を基準とする分類は、そうした二元論的な見方をとらない。Croft (2003: 222)が指摘しているように、「主動詞語幹が表すのは経路か共事象か」という見方が適用できるのは、「主動詞語幹+付随要素」という非対称的方略 *asymmetric strategies* を用いて複雑事象を表現する付随要素枠づけタイプと主動詞語幹枠づけタイプの言語に限られる。動詞述語の連続といった「同等の形式」を並列させる対称的方略 *symmetric strategies* を用いて複雑事象を表現する言語には当てはまらない。また、実際のところ、複雑事象の種類によって異なる方略を用いたり、類型に変異が起こったりする「分裂 *split*（あるいは相補 *complementary*）」タイプの言語は少なくない（Croft et al. 2010: 202; cf. ‘*split or complementary system of conflation*’ Talmy 2000: 64-66）。そこで Croft et al. (2010) は、特定の言語タイプあるいは特定の複雑事象タイプに限定されない、全ての言語、全ての複雑事象に適用可能な「節統合度」という連続体の基準を用いて、より広範な統語形式を含む複雑事象構文の類型論を提示したのである。

中国語とタイ語の移動事象表現を対照する枠組みとしては、二元論的分類も、その変形である三元論的分類も採用できない。そのどちらの枠組みも両語の最も大きな違いである節統合度の違いを明確化することができないからである。節統合度がある程度高く、動詞と助辞の区別がつけられる中国語については、二元論的分類と三元論的分類のどちらが妥当かといった議論をすることも可能で、その議論は意味のあることかもしれない。しかし節統合度が非常に低く、動詞と助辞の区別を前提とした分析が適用できないタイ語については、そのような議論自体が成り立たない。単一移動事象の単一経路でさえ複数の動詞述語

で表され得る極端に節統合度の低いタイ語のような言語も分析対象に含めるのであれば、「経路が主動詞語幹によって表されるか否か」という二元論的な分析手法を捨て、「節統合度」という連続体の概念を分析基準とするしかない。節統合度を基準とする枠組みは、世界のあらゆる言語のあらゆる複雑事象構文を扱える枠組みである。

これまで中国語で表される移動事象とタイ語で表される移動事象はどの類型論の枠組みにおいても同一類型に分類されてきた。例えば、二元論的分類では「付随要素枠づけ（非主要部枠づけ）」タイプに分類される（e.g. Talmy 2000, 2009; Matsumoto 2003; Peyraube 2006）。三元論的分類では「均等枠づけ（共主要部コーディング）」タイプに分類される（e.g. Zlatev & Yangklang 2004, Chen & Guo 2009, 松本 2013, Spring & Horie 2013）。節統合度を基準とする分類では「連続」タイプに分類される（e.g. Croft 2003, Croft et al. 2010）。自律移動事象と使役移動事象との間（あるいは「動作主自律移動事象」と「非動作主自律移動事象および使役移動事象」との間）で類型が異なる「分裂（並行 parallel）」タイプに分類する研究者もいる（e.g. Lamarre 2007, Kessakul 2007, Ji et al. 2011）。

しかし本稿で説明してきたように、どのような統語スロットを持ち、どのような意味構成素を含み得る構文なのかを詳細に検討すると、その構文の全体像は中国語とタイ語で大きな違いがあることが分かる（cf. 2.1 節の(25), (26)）。両語で表される移動事象を同じ類型に分類するのは不合理である。節統合度を分類基準とする類型論において、タイ語の移動事象が典型的な連続タイプ（節統合度がより低いタイプ）であるとすれば、経路が付随要素（助辞）で表され得る中国語の移動事象はむしろ付随要素枠づけタイプ（節統合度がより高いタイプ）に近いと考えてよいであろう。

4. まとめ

本稿では「統語スロットの固定化、経路動詞の文法化、意味構成素の多様性」という3つの点を取り上げ、中国語とタイ語の移動事象表現を対照した。中国語移動事象表現は節統合度（統語スロットの固定化、経路動詞の文法化）が高く、そのため意味構成素の種類が貧弱であること、一方、タイ語移動事象表現は節統合度が低く、そのため意味構成素の種類が豊富であることを明らかにした。本稿の分析結果を(37)にまとめる。

(37) 中国語移動事象表現とタイ語移動事象表現の違い

1 節構成素の統語スロットの固定化の度合い	中国語 > タイ語
2 経路を表す節構成素の文法化の度合い	中国語 > タイ語
3 移動事象の意味構成素の多様性の度合い	中国語 < タイ語

本稿の主張は以下の2点である。第一に、節統合度が非常に低く、動詞と助辞の区別を前提とした分析の枠組みを適用できないタイ語のような言語を含めて移動事象の類型論（あるいはもっと広く複雑事象構文の類型論）を考えるのであれば、節統合度を基準とする枠組みを採用するのがよい。そうせざるを得ない。第二に、その枠組みを用いて中国語で表される移動事象とタイ語で表される移動事象を比較対照して分類すれば、前者は付随要素枠づけタイプ寄り（あるいは分裂タイプ）に分類され、後者は連続タイプに分類される。

謝辞

本稿は平成24年度神田外語大学研究助成（短期在外研究, No. 11）とタイ国家学術研究評議会 National Research Council of Thailand の許可 (No. 0002/6121) を受けて平成24年10月から翌年2月までタイで実施した調査研究の成果の一部である。青野英美氏と高橋海生氏には中国語例文の適格性について判断していただいた。ここに記して感謝申し上げる。会議発表のときに有益な質問やコメントをいただいた聴衆の方々にも感謝申し上げる。本稿に不備や誤りがあれば全て筆者の責任である。

参考文献

- Beavers, John, Beth Levin & Shao Wei Tham. 2009. The typology of motion expressions revisited. *Journal of Linguistics* 46: 331–377.
- Bisang, Walter. 2003. Aspect in East and Mainland Southeast Asian languages: A first step. *MANUSYA: Journal of Humanities, Special Issue No.6: Thai From Linguistics Perspectives*: 43–56.
- Chen, Liang & Jiangshen Guo. 2009. Motion events in Chinese novels: Evidence for an equipollently-framed language. *Journal of Pragmatics* 41: 1749–1766.
- Croft, William. 2003. *Typology and Universals, Second Edition*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Croft, William, Jóhanna Barðdal, Willem Hollmann, Violeta Sotirova & Chiaki Taoka. 2010. Revising Talmy's typological classification of complex event constructions. In H. C. Boas (ed.) *Contrastive Studies in Construction Grammar*, 201–235. Amsterdam: Benjamins.
- Ji, Yinglin, Henriëtte Hendriks & Maya Hickmann. 2011. The expression of caused motion events in Chinese and in English: Some typological issues. *Linguistics* 49(5): 1041–1077.
- Kessakul, Ruetaivan. 2005. The Semantic Structure of Motion Expressions in Thai. Unpublished Ph.D. dissertation, Tokyo University.
- Kessakul, Ruetaivan. 2007. タイ語の空間移動表現と類型論的な位置付け. C.ラマール&大堀壽夫(編) *空間移動の言語表現の類型論的研究1: 東アジア・東南アジアの視点から*, 121-129. 東京: 東京大学 21 世紀 COE プログラム「心とことば: 進化認知科学的展開」.
- Lamarre, Christine. 2007. The linguistic encoding of motion events in Chinese: With reference to cross-dialectal variation. In C. Lamarre & T. Ohori (eds.) *Typological Studies of the Linguistic Expressions of Motion Events, Volume 1: Perspectives from East and Southeast Asia*, 3–33. Tokyo: 21st Century COE Program, Center for Evolutionary Cognitive Sciences at the University of Tokyo.
- Lamarre, Christine. 2008. The linguistic categorization of deictic direction in Chinese: With reference to Japanese. In D. Xu (ed.) *Space in Languages of China: Cross-linguistic, Synchronic and Diachronic Perspectives*, 69–97. Springer Science+Business Media.

- Lin, Jingxia & Jeeyoung Peck. 2011. The syntax-semantics interface of multi-morpheme motion constructions in Chinese: An analysis based on hierarchical scalar structure. *Studies in Linguistics* 35(2): 337–379.
- Matsumoto, Yo. 2003. Typologies of lexicalization patterns and event integration: Clarifications and reformulations. In S. Chiba et al. (eds.) *Empirical and Theoretical Investigations into Languages: A Festschrift for Masaru Kajita*, 403–418. Tokyo: Kaitakusha.
- 松本曜. 2013. 諸言語の移動表現. 国立国語研究所共同研究プロジェクト「空間移動表現の類型論と日本語：ダイクシスに焦点を当てた通言語的実験研究」に関する研究発表会（上智大学、2013年9月12日）での配布資料.
- Peyraube, Alain. 2006. Motion events in Chinese: A diachronic study of directional complements. In M. Hickmann & S. Robert (eds.) *Space in Languages: Linguistic Systems and Cognitive Categories*, 121–135. Amsterdam: Benjamins.
- Post, Mark W. 2007. Grammaticalization and compounding in Thai and Chinese: A text-frequency approach. *Studies in Language* 31(1): 117–175.
- Rappaport Hovav, Malka & Beth Levin. 2010. Reflections on manner/result complementarity. In M. Rappaport Hovav, E. Doron & I. Sichel (eds.) *Syntax, Lexical Semantics, and Event Structure*, 21–38. Oxford: Oxford University Press.
- Spring, Ryan & Kaoru Horie. 2013. How cognitive typology affects second language acquisition: A study of Japanese and Chinese learners of English. *Cognitive Linguistics* 24(4): 689–710.
- Slobin, Dan I. 2004. The many ways to search for a frog: Linguistic typology and the expression of motion events. In S. Strömquist & L. Verhoeven (eds.) *Relating Events in Narrative, Vol.2: Typological and Contextual Perspectives*, 219–257. Mahwah, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates.
- Takahashi, Kiyoko. 2005. The allative preposition in Thai. In P. Sidwell (ed.) *SEALS XV: Papers from the 15th Meeting of the Southeast Asian Linguistics Society*, 111–120. Canberra: Pacific Linguistics.
- 高橋清子. 2006. 日本語から見たタイ語：タイ語・中国語・日本語三つ巴の楽しさ. *日本語学* 25(3): 34–44.
- Takahashi, Kiyoko. 2009a. Thai motion event expressions: A literature review. In M. Minegishi, K. Thepkanjana, W. Aroonmanakun, & M. Endo (eds.)

Proceedings of the Chulalongkorn-Japan Linguistics Symposium, 29–43.
Tokyo: Global COE Program: Corpus-based Linguistics and Language Education, Tokyo University of Foreign Studies.

Takahashi, Kiyoko. 2009b. Arrival expressions in Thai. *Journal of the Southeast Asian Linguistics Society* 2: 175–193.

高橋清子. to appear. タイ語の移動表現. 松本曜 (編) *移動動詞の類型論：対照研究*. くろしお出版.

Takahashi, Kiyoko. to appear. Deictic motion constructions in Japanese and Thai. In P. Pardeshi & T. Kageyama (eds.) *The Handbook of Japanese Contrastive Linguistics*. Berlin: Mouton de Gruyter.

Talmy, Leonard. 2000. *Toward a Cognitive Semantics, Vol.2: Typology and Process in Concept Structuring*. Cambridge: MIT Press.

Talmy, Leonard. 2009. Main verb properties and equipollent framing. In J. Guo, E. Lieven, N. Buding, S. Ervin-Tripp, K. Nakamura & Ş. Özçalışkan (eds.) *Crosslinguistic Approaches to the Psychology of Language: Research in the Tradition of Dan Isaac Slobin*, 389–402. New York: Psychology Press.

Zlatev, Jordan & Caroline David. 2003. Motion event constructions in Swedish, French and Thai: Three different language types? *MANUSYA: Journal of Humanities, Special Issue No.6: Thai From Linguistics Perspectives*: 18–42.

Zlatev, Jordan & Peerapat Yangklang. 2004. A third way to travel: The place of Thai in motion-event typology. In S. Strömquist & L. Verhoeven (eds.) *Relating Events in Narrative, Vol.2: Typological and Contextual Perspectives*, 159–190. Mahwah, N.J.: Lawrence Erlbaum Associates.